

# 地域に根ざす芸術教育実践が大学生のキャリア観醸成に与える影響

—高知大学「地域に根ざす芸術拠点づくり—附属機関との横断的研究体制の構築—」の事例をもとに—

森田佐知子<sup>1</sup>・野角孝一<sup>2</sup>・梶原彰人<sup>2</sup>・玉瀬友美<sup>2</sup>・吉岡一洋<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>高知大学学生総合支援センター・<sup>2</sup>高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門)

The Impact of Art Education Practices in the Community on University Students' Career Development

Sachiko Morita<sup>1</sup>, Koichi Nozumi<sup>2</sup>, Akito Kajiwara<sup>2</sup>, Yumi Tamase<sup>2</sup> and Kazuhiro Yoshioka<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Center for General Student Support, <sup>2</sup> Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Education Unit

**Abstract:** This study aims to clarify the impact of art education experiences in a community on university students' career development. To clarify the above, we conducted a semi-structured interview survey of 9 students and analyzed the data using the method of Modified Grounded Theory Approach (M-GTA). As a result, the following four things became clear. (1) The practice of art education in the community contributes to the students' career development as a 'professional of art education in the community' regardless of the profession that the student aims for; (2) The process of students' career development through art education practice in the community is different between art the education practice and the music education practice; (3) Reflection reports are very effective; (4) There are challenges that students have in common in these practices. What is clarified in this study is a significant perspective in fostering students' career path through art education practices in the community.

キーワード：地域，芸術教育実践，キャリア形成

Keyword: Community, Art Education, Career development

## 1. はじめに

近年、文部科学省による「地（知）の拠点整備事業：COC事業」や「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業：COC+事業」などの影響もあり、各大学による地域に根ざした教育研究がますます盛んになっている。また国立大学では、第3期中期目標期間（2016年度～2021年度）において、国立大学運営費交付金に「3つの重点支援の枠組み<sup>注1)</sup>」が創設され、その中のひとつにも「地域のニーズに応える人材育成・研究を推進」という枠組みが設けられた。高知大学では上記COC事業及びCOC+事業に取り組むとともに、3つの重点支援の枠組みにおいてはこの「地域のニーズに応える人材育成・研究を推進」を選択し、地域の中核を担う人材の育成・研究を推進している。

このような地域を意識した教育研究では、大学の各学部や機関、センターが個別に地域と連携して教育研究を行うことも多いが、高知大学ではそうした取り組みに加えて、総合大学である強みを生かし、大学と附属機関が連携した様々な教育実践・研究をおこなってきた。例えば、2015年から高知大学教育学部と高知大学教育学部附属幼稚園（以下、「附属幼稚園」と略）が連携して、特定のモチーフを設定せず園児たちに絵具で自由に遊んでもらう「絵具遊び活動」を実施<sup>1)</sup>。2016年には、高知大学医学部附属病院（以下、「附属病院」と略）と連携し、高知大学教育学部の学生が授業において制作した作品を主として附属病院内に展示し空間を構成する「ドローイング展」や、附属病院小児科病棟のプレイルームでの「ミニコンサート」を実施した<sup>2)</sup>。

こうした附属機関と連携した地域に根ざす芸術教育実践は、学生たちが教育実習では習得しにくい知識や経験、技術を身につける、また附属機関や地域への貢献の機会にもなっている。しかしこうした教育実践は、その活動に参加する学生たちの、①「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成しているのだろうか、そして醸成しているとすれば、②どのように醸成しているのだろうか。

そこで本研究では、高知大学 令和元年度「学長裁量経費」に採択された「地域に根ざす芸術拠点づくりー附属機関との横断的研究体制の構築（代表者：野角 孝一）」の一環で実施した芸術教育実践を事例に、上記2点の課題を明らかにすることを目的とした。

## 2. 事業の概要

はじめに、本事業の概要を説明する。本事業は、高知大学の第3期中期計画【40】<sup>注2)</sup>に関連して地域のモデル校園として、地域の新たな芸術教育を創出できる人材を育成することを目的としたものである。活動は、前節で述べたこれまで高知大学で行ってきた取組をさらに発展させ、附属幼稚園及び附属病院をフィールドとした絵具遊び活動と演奏会の実施を通じて学生に教育実習では得られない実践力を身につけさせるとともに、芸術と音楽を専攻する学生の表現力向上を図った。また本事業は、大学の附属機関にて教育実践を行うことで、それらを通じて大学が培ってきた芸術や音楽に関する知識を地域に還元するという、総合大学の強みを活かした横断的な教育研究事業であるという特徴を持たせたものである。本事業の具体的な活動を表1に示す。

表1 本事業「地域に根ざす芸術拠点づくりー附属機関との横断的研究体制の構築」の活動

日程	活動内容	活動場所	日程	活動内容	活動場所
2019年5月21日～5月31日	アート週間	附属幼稚園	2019年11月29日	絵具遊び活動：ビリビリアート	附属幼稚園
2019年6月2日	アート週間：活動報告	附属幼稚園	2019年12月6日	絵具遊び活動：デカルコマニー	附属幼稚園
2019年5月21日	絵具遊び活動：額づくり	附属幼稚園	2019年12月21日	ファミリーコンサート	高知大学
2019年6月18日	絵具遊び活動：ローラー版画	附属幼稚園	2020年1月17日	絵具遊び活動：野菜スタンプ	附属幼稚園
2019年7月9日	絵具遊び活動：ローラー版画	附属幼稚園	2019年12月23日～2月28日	ビリビリアート展	附属病院
2019年8月7日	絵具遊び活動：勉強会	附属幼稚園	2020年2月13日～2月21日	アートの日展覧会	附属幼稚園
2019年9月12日	絵具遊び活動：ローラー版画	附属幼稚園	2020年2月26日～3月6日	ビリビリアート展	附属幼稚園
2019年10月25日	絵具遊び活動：ローラー版画	附属幼稚園	2020年2月28日	絵具遊び活動：トレイ版画、吹き流し	附属幼稚園
2019年10月30日	オータムコンサート	附属病院			

また、2019年11月29日に実施した「絵具遊び活動：ビリビリアート」及び2019年12月21日に実施した「ファミリーコンサート」の当日の様子、そして2019年12月23日～2020年2月28日に実施したビリビリアート展の展示の一部を以下に示す。



図1 ビリビリアート活動の様子①



図2 ビリビリアート活動の様子②

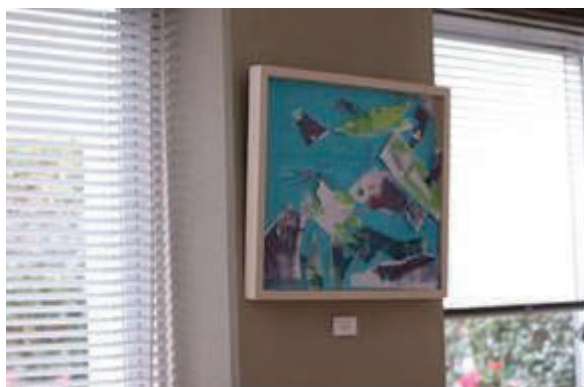


図3 ビリビリアート展 展示①



図4 ビリビリアート展 展示②



図5 ファミリーコンサートの様子①



図6 ファミリーコンサートの様子②

### 3. 方法

#### 3-1. メタ研究法としての SCQRM (Structure Construction Qualitative Research Method)

本研究は、附属機関と連携した地域に根ざす芸術教育実践が、その活動に参加する学生たち自身にどのような気づきをもたらし、さらには将来の進路選択等にもつながるキャリア観、特に「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」にどのような影響を与えているのかについて探索的に調査するものである。そのため、探索的研究に適した学生へのインタビュー調査を中心とすることとした。本研究では、学生の気づきやキャリア観という量的な測定が難しい事柄を掴むため、少数の事例を対象に深くその体験を聞き出すことで、学生の意識への影響を構造化することとした。そこで、少数事例であっても科学性を担保し、対象とした事例の予測や制御につなげることが可能<sup>3)</sup>な SCQRM (Structure Construction Qualitative Research Method)<sup>4) 5)</sup>をメタ研究法として採用すること

とした。

### 3-2. 対象者

SCQRM では自分の関心（リサーチクエスチョン）に照らして（相關的に）対象者をサンプリングする<sup>4)</sup>。本研究では、研究対象事例とした「地域に根ざす芸術拠点づくり—附属機関との横断的研究体制の構築」における教育実践の中心的活動である「絵具遊び活動」と、音楽教育実践である「オータムコンサート」及び「ファミリーコンサート」の2つを選択し、そこに参加した学生を対象とすることとした。

「絵具遊び活動」は、参加した学生がもともと少数であるため全員に対してインタビュー調査を実施した。一方で「オータムコンサート」、「ファミリーコンサート」については参加学生が多数であったため、専門科目の学習が深まり、将来のキャリアについてもある程度方向性が見えているであろう上級生のみを対象とした。このようにして決定した本研究の対象者の属性及びインタビュー日時は表2の通りである。

表2 対象者の属性及びインタビュー日時

教育実践	対象者	学年	学部	出身地	インタビュー日時
美術教育実践	Aさん	4	地域協働学部	高知県外	2020年1月10日（金）9：00-10：00
	Bさん	4	教育学部	高知県外	2020年1月10日（金）13：10-14：10
	Cさん	1	地域協働学部	高知県	2020年1月10日（金）14：15-15：15
	Dさん	2	地域協働学部	高知県外	2020年1月10日（金）15：20-16：20
音楽教育実践	Eさん	3	教育学部	高知県外	2020年1月8日（水）14：50-15：50
	Fさん	3	教育学部	高知県外	2020年1月8日（水）15：50-16：50
	Gさん	3	教育学部	高知県	2020年1月8日（水）16：50-17：50
	Hさん	4	教育学部	高知県	2020年1月15日（水）15：00-16：00
	Iさん	4	教育学部	高知県外	2020年1月15日（水）16：30-17：30

インタビューは2020年1月に高知大学就職室の面談ルームにて実施した。1人あたりのインタビュー時間はおよそ60分である。対象者には事前に、研究の目的、研究の方法、研究期間、個人情報取り扱い、研究結果の公表、研究責任者が記載された「研究協力依頼書」を文書で渡し、インタビューの前に再度口頭で説明を行った。また本研究への協力は自由意志によるものであり、随時拒否・撤回できる旨も説明した。対象者には、上記の説明後、説明内容を理解できたかを自ら確認した上で、研究同意書に署名していただいた。また対象者にインタビューの内容を録音する旨の承諾を得て、インタビュー終了後に逐語録を作成した。

インタビューは、事前に作成した半構造化した質問項目に沿って実施した。質問項目としては最初に、それぞれの教育実践における対象者の役割と参加してみて感じたことを質問した。次に、地域と連携した活動が自身の学習やキャリア設計に与える影響、これまでの地域における教育実践の経験とそこで感じた課題、地域における教育拠点としての大学の役割などについて質問したが、それぞれの対象者の話を深めていけるよう配慮した。

なお、音楽教育実践参加者（ファミリーコンサートの活動に参加した音楽教育、及び幼児教育専攻の学生）には、活動からの気づきをまとめ地域の芸術教育を担う人材としての内省を促すため、『「ファミリーコンサート」の一連の活動から「音楽を通じて地域に貢献する」とはどういうことだと感じましたか？また音楽を通じて地域に貢献する際に大切なことや求められる力はどんなものだと考えますか？』というレポートを課した。音楽教育実践参加者のインタビューにあたっては、このレポートの内容を踏まえ、質問を行った。

### 3-3. 分析の枠組み

本研究は、仮説構築型の研究であるため、データの分析から独自の説明概念をつくって、それらによって統合的に構成された説明力に優れた理論<sup>6)</sup>であるグラウンデッド・セオリーから分化した修正版グラウンデッド・セオリー（以下、「M-GTA」と略）を分析の枠組みとして採用した。M-GTAはグラウンデッド・セオリーを継承しつつも、データの切片化をせずそれに代わるデータの分析法を、独自のコーディング方法と【研究する人間】の視点とを組み合わせることで手順として説明している<sup>6)</sup>。また面接型調査に有効に活用できることから、本研究の枠組みとして有効であると考えられる。

分析は、木下（2003）に従い、分析ワークシートを用いて行った。木下（2003）によると、ワークシートは、概念名、その定義、ヴァリエーション、理論的メモの4つの欄で構成され、データとは切り離して別に作成する。具体的には、まずデータの着目箇所をヴァリエーションに記入し、次に検討の結果、採用することにした解釈を定義欄に記入するという手順である。それ以外の解釈案で重要なものは理論的メモ欄に記入する。そして定義を凝縮表現したコトバを概念欄に記入する。図7に分析ワークシートの例として、概念名「子供たちの成長と創造力への感銘」の分析ワークシートをあげる。

概念名	子供たちの成長と創造力への感銘
定義	ビビリアート活動で最も印象に残っていることは子供たちの成長や想像力、観察力への感心、驚きである。子供たちが自分たちでは思いつかないような発想を持ちつつ、しっかりと成長していく姿に感銘を受けている。
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり論文で書いて、本一杯読んで、論文書いてるときって、あんまり子供が持つ、何でしょう、エネルギーとかパワフルさとか想像力の深さ、すごさっていうのを、本では書いてあるけど感じる事ができないので、ほんとにそうなのかなっていうところがあったんですね。でも、実際参加をしてみても、子供たちは私たちよりも柔軟な発想を持ってるとは思えないかなっていうことに気づいて。（Aさん）</li> <li>・何かすごい小っちゃい子供たちなのに、何かできることが増えている気がするなって。静かに並ぶとか、絵の具の扱い方とか、混ぜて色が変わることも知っていたし、いろんなことをすごい理解していて、それでのびのびと重ねてみたりとか、糊をベッて貼ったりとかってすることをやっているなって感心しました。すごいなって思いました。（Bさん）</li> <li>・何かすごい、1枚のこういうのにちゃんと物語をのせるんだなと思って。（Bさん）</li> <li>・何か結構みんなそれぞれ考えて、試行錯誤して切って、貼ってっていうのをやっていて、何かこう、1個できたら呼んで教えてくれたりするとところとか、可愛らしいなって思うし、楽しかったです。（Cさん）</li> <li>・みんな元気なので元気をもらうことがあったり、アートに関しては、やっぱり大学生じゃ思いつかないようなアイデアとか斬新な発想とか、そういったものを僕自身感じることもできて、いい面ばかりだったかなと思います。（Dさん）</li> </ul>
理論的メモ	ビビリアート活動の印象をオープンクエスチョンで質問した際に、対象者4名全員が子供たちの想像力等について語った。子供たちを前にしての教育実践は、大学での理論学習では得られない大きなインパクトを学生に与えていることを再確認できた。

図7 概念名「子供たちの成長と創造力への感銘」の分析ワークシート

#### 4. 分析結果

##### 4-1. 美術教育実践参加者の分析結果

美術教育実践参加者へのインタビューにおいて、上記の手順で生成された概念は13となった。これらをその関連性から5つのカテゴリーにまとめて整理し、「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成するプロセスについて、図8の仮説モデルを作成した。以下に、5つのカテゴリーとそのカテゴリーに属する概念の説明を行いながら、そのストーリーラインを説明する。以下、カテゴリーは【】で、概念は「」で囲み表示することとする（4-2. 音楽教育実践参加者の分析結果も同じ）。

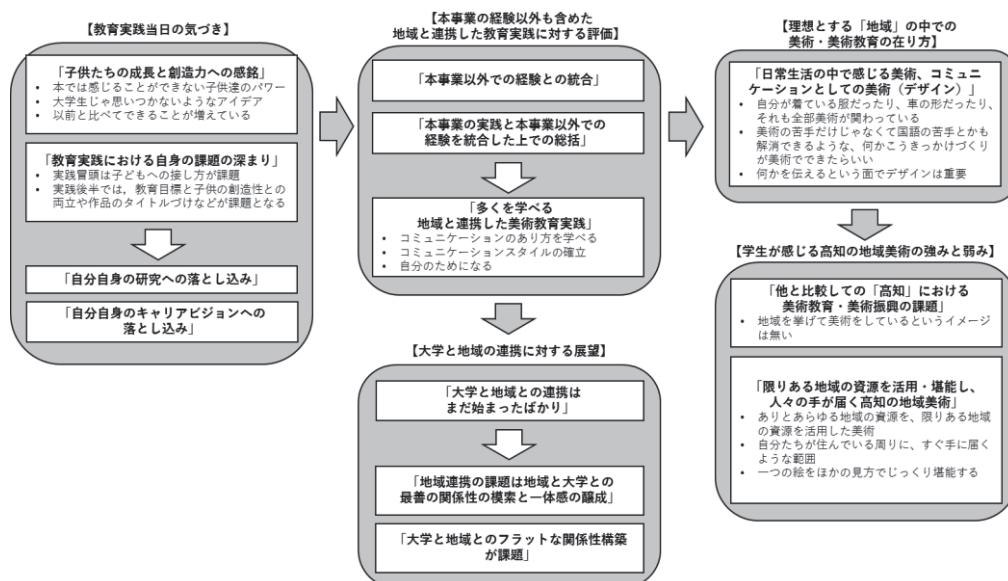


図8 美術教育実践参加者における「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」醸成プロセス仮説モデル

まず【教育実践当日の気づき】は、「子供たちの成長と創造力への感銘」、「教育実践における自身の課題の深まり」、「自分自身の研究への落とし込み」、「自分自身のキャリアビジョンへの落とし込み」という4つの概念で構成された。地域における教育実践は当然のことながら、普段子供たちに接する機会の多い教育学部の学生を除いては大きなインパクトを与えるものとなっていた。教育学部以外の学生はみな、教育実践の序盤は子供への接し方を手探りで探りつつ参加しているが、教育実践の後半になると、子供の創造性を尊重しつつ当日の教育目標を達成させるにはどうしたらよいかといった、教育の本質的な部分を課題として認識するようになる。

また美術教育実践の対象者のうち、教育学部の学生は1名だけであったが、教育学部の学生で教師を目指す学生も、教育学部以外の学生で一般企業への就職を希望する学生も、そのどちらもが教育実践当日の気づきを自分自身の研究テーマや将来のキャリアビジョンに落とし込むことができていた。例えば教育学部の学生は以下のように語った。

“義務教育、小学校・中学校の教育をメインにしたんですけど、そこってやっぱりカリキュラムというか、学習指導要領が練られてて、その狙いどおりに持っていくのは先生たちの仕事じゃないですか。なので、そこはちょっと難しいんですけど、先生たちが生徒に伝えたいことを見せつつも、これからは、アクティブラーニングの時代になっていくということで、やっぱり子供たちの創造性、自発的な行動もうまく組み入れた活動をしていかなきゃいけないと。(Aさん)”

一方で、一般企業への就職を希望する学生も以下のように語った。

“最終的に目指しているのは、自分で雑誌をつくってっていうのが目標なんですけど、ゆくゆくは発信できる側になりたいというか。(先生の姿を見て)何か発信する側となると、多分ああいう人のことを言うのかなって思ったんですけど、何かやっぱり発信するには自分がその分、経験もせないかんし、相手に対してどう働きかけるかっていうのも大事やと思うので、何かちょっと難しそうやなっていうふうに思いました。(Cさん)”

【本事業の経験以外も含めた地域と連携した教育実践に対する評価】は、「本事業以外での経験との統合」、「本事業の実践と本事業以外での経験を統合した上での総括」、「多くを学べる地域と連携した美術教育実践」の3つの概念から構成された。対象者はみな、地域の芸術教育を考察する過程において、本事業と合わせて、これまでに経験した他の地域における活動での経験を踏まえて考察を行っていた。それらの経験を統合した上で、地域と連携した美術教育実践は、主には多様な人々とのコミュニケーションの取り方を学べる成長の場として捉えているようであった。

【理想とする「地域」の中での美術・美術教育のあり方】は、「日常生活の中で感じる美術、コミュニケーションとしての美術(デザイン)」という1つの概念から構成した。このカテゴリーは後に述べる【学生が感じる高知の地域美術の強みと弱み】と関連、あるいは、それを前提として語られており、日常にある様々なものから美術を感じ取る、または美術学習を通じて他の科目を学ぶ、地域におけるコミュニケーションツールとしてのデザイン、といったイメージが語られた。地域におけるコミュニケーションツールとしてのデザインという言葉は、地域協働学部にも所属しながらデザインにも興味を持ち学んでいる学生が語ったイメージである。その学生は以下のように語った。

“例えば、新しいシステムを浸透させていくためには、ちゃんとしたエビデンスとか提示してっていうのも大事だと思うんですけど、やっぱり高齢者とかになると、そういう難しい文章を読んだりとか、そういうのは難しいし、やっぱり面倒くさいことになってくると思うので、そういった面で動画とかポスターとか、視覚的に訴えるじゃないんですけど、見て読みたいと思うものをつくったり、分かりやすいと思うものをつくることがやっぱり大切だと思うので、そういった面ではコミュニケーションツールというか、何かを伝えるっ

という面でデザインは重要なものかなとは思いますが。（中略）単なる動画の何ていうんですかね、きれいな動画とか、風景がきれいな動画で質が高いとか、クオリティーが高い動画をつくるっていうだけじゃなくて、そっちの違う面でのアイディアとか、そういったところを調査とか分析もしていかないといけないし、そのやり方とかアプローチの方法を模索している途中です。（Dさん）”

【学生が感じる高知の地域美術の強みと弱み】は、「他と比較しての「高知」における美術教育・美術振興の課題」と「限りある地域の資源を活用・堪能し、人々の手が届く高知の地域美術」の2つの概念から構成された。美術教育実践における対象者4名のうち3名が、大学がある高知県以外の出身であることから、このカテゴリーについては、自分の出身「地域」と高知県との比較を交えながらの語りが多くなったが、全て学生が、他県と比較して高知県の美術教育、美術振興の遅れを感じていた。しかしその一方で彼らは、地域における美術教育実践やその他の活動を通じて高知ならではの美術の実践を見たり体験したりすることで、高知特有の美術（「地域美術」）について共通したイメージを語った。それは、限りある資源を活用した美術、一般の人々にも手が届く美術、少ない美術をじっくり堪能する、といったものであった。この概念における学生の語りを下記に一部抜粋する。

“高知だと地域資源が、周りにある高知の自分たちが住んでいる周りに、すぐ手に届くような範囲ではあるんですけども、で、うまくアートとして見せていく。そういう派手とはいわない、素朴ともいえないけど、そういう良さ、地域の味を出した美術教育がすごい、最近ちょっと盛り上がってきているなというのは感じます。（Aさん）”

“その絵の物語って何だろうとかって、友達とお話書いて、見せ合いっことかしたりとかして、きっと何かいろいろ楽しみ方があるんだろうなと。もちろん、東京とか大阪とかですごくたくさんの絵を見て、いろんな展覧会で新しいものをたくさん見るのもすごくいい刺激になると思うんですけど、一つの絵をほかの見方でじっくり堪能するっていうのも、何かおつだなと思っています。（Bさん）”

最後の【大学と地域の連携に対する展望】は、「大学と地域との連携はまだ始まったばかり」、「地域連携の課題は地域と大学との最善の関係性の模索と一体感の醸成」、「大学と地域とのフラットな関係性構築が課題」の3つの概念から構成された。美術教育実践参加者は、4名中3名が地域協働学部の学生であり、彼らは必ずしも普段地域において美術教育実践を行っているわけではないこともあり、本カテゴリーは、やや本事業以外での経験から語られる傾向があった。普段の地域における活動の中で彼らが最も課題として認識していることは、大学と地域との関係性や地域における一体感の醸成であった。大学と地域との関係性について、例えば学生は以下のように語っている。

“学部が思う協働の形と、地域の方が思う協働の形は、ちょっと違う気がしますね。学校の方は、何だろう、本当に対等な関係でやっていくっていう感じなんです。利害が一致しない者同士が、同じところに立ってやっていくみたいな。でも、地域の方の感じを見ると、やっぱりこちら側はそこで活動させてもらう側なので、どうしても下になるんですよ、地域の方より、立ち位置が。その関係がどんどん続いていくみたいになっていく感じなので、絶対、対等にはならないんですよ。やらせていただいているので、それはそうなんですけど、やっぱりそういうところがあるかなっていう。（Cさん）”

“実習でも手伝ってくれる、一緒にやっていく地域の人が結構限られていて、いつも同じ人たちばかりなので、そうじゃなくて、その地域住民全員がその地域に対してのナショナリズムというか、そういったものを持って、個人個人全員が地域のためにとか、そういう気持ちを何ていうんですか、一部の人だけでなく全員に持ってもらうためにはどうすればいいかというところを考えてみるんです。（Dさん）”

上記の通り、どの学生も、大学と地域との連携はまだ始まったばかりで、両者が対等で最善の関係性を構築するにはまだ時間がかかるとの認識を見せた。

4-2. 音楽教育実践参加者の分析結果

音楽実践参加者へのインタビューにおいて、同様の手順で生成された概念は 13 となった。これらをその関連性から 5 つのカテゴリーにまとめて整理し、「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成するプロセスについて、図9の仮説モデルを作成した。以下に、5 つのカテゴリーとそのカテゴリーに属する概念の説明を行いながら、そのストーリーラインを説明する。

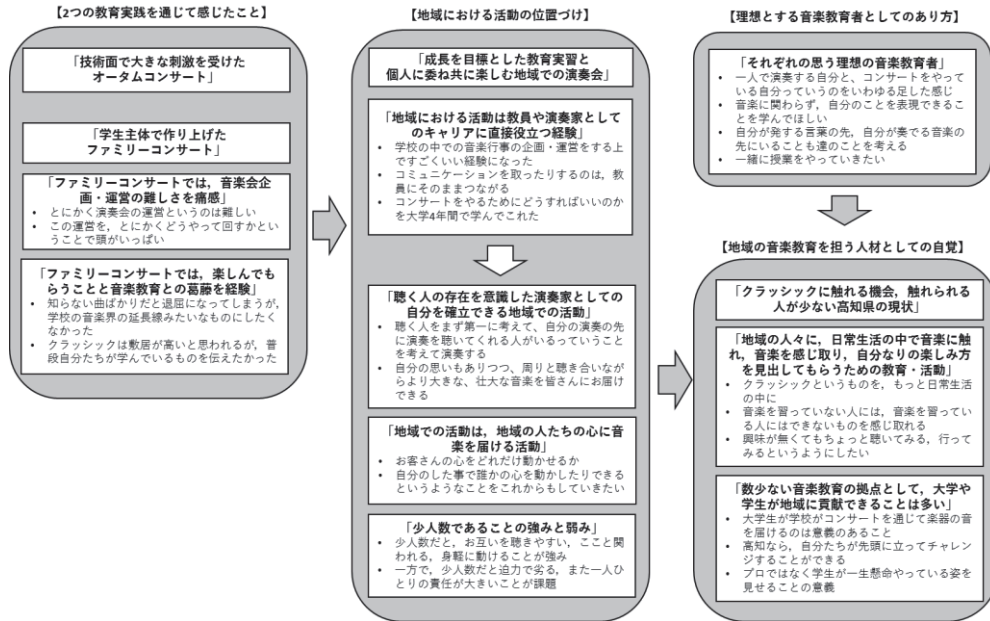


図9 音楽教育実践参加者における「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」醸成プロセス仮説モデル

まず【2つの教育実践を通じて感じたこと】は、「技術面で大きな刺激を受けたオータムコンサート」、「学生主体で作りあげたファミリーコンサート」、「ファミリーコンサートでは、音楽会企画・運営の難しさを痛感」、「ファミリーコンサートでは、楽しんでもらうことと音楽教育との葛藤を経験」の4つの概念から構成された。本研究の音楽教育実践では、オータムコンサートとファミリーコンサートという2つの演奏会活動を対象としたが、この2つには大きな違いがあった。その違いとは、オータムコンサートでは演奏会の企画やプログラムの考案を教員が行ったのに対して、ファミリーコンサートではそれを学生（主に3年生）が行ったということ、オータムコンサートでは第一線で活躍するプロの演奏家を招いて演奏会を行った、という2点である。このことから学生は、オータムコンサートでは、プロとして活躍する演奏家とともに演奏する機会を得た中で、音楽の技術的な面で大きな刺激を受けていた。一方でファミリーコンサートでは自分たちで一から演奏会を企画し、運営することの難しさを体感する機会となったようであった。以下のような語りから、ファミリーコンサートでは、自分たち学生が一から演奏会を作り上げる過程で試行錯誤している様子と演奏会終了後の達成感が見て取れる。

“ファミリーコンサートの方はすごく達成感もあって、結構、集大成みたいな感じだったので、もう、なのですごい良かったと思う。達成感がすごくありました。結構、このファミリーコンサートは、すごい、時間をすごいかけたんですよ。1カ月ぐらい前から週に2日練習入れたりとか、結構時間をかけて、しかも結構ハードに個人練習とかもみんなしてくれていたんで、もうやり終えた後の達成感っていうのは、すごいありましたね。(Gさん)”



“自分の学年が主に進行をしていくときに、こうやって演奏会をしていくまでに、すごいやることもたくさんあるし、何か今回だったら音楽にあんまり関わることのないというか、そういう小さいお子さんとかがいても、コンサートに行けたりとかするので、そういう方たちに音楽を楽しんでもらうために、どういうプログラムにしたりとか、どういう工夫が必要なのかなっていうのとか、何か進行するのにどういうお話をしたらいいのかなっていうのも一緒に考えることができたので勉強になったと思います。（Iさん）”

【地域における活動の位置づけ】は最も大きなカテゴリーで、「成長を目標とした教育実習と個人に委ね共に楽しむ地域での演奏会」、「地域における活動は教員や演奏家としてのキャリアに直接役立つ経験」、「聴く人の存在を意識した演奏家としての自分を確立できる地域での活動」、「地域での活動は、地域の人たちの心に音楽を届ける活動」、「少人数であることの強みと弱み」の5つの概念から構成された。音楽教育実践のインタビュー対象者は全員が教育学部音楽教育専攻の3,4年生であることもあり、全員が教育実習や今回のような地域での活動を一定量以上経験していた。彼らは皆、自身の学修における教育実習と本事業のような地域における活動を明確に区別しており、その上で、こうした地域における活動もまた、授業や教育実習と同様に、自身の教員や演奏家としてのキャリア形成に役立つ経験であると認識していた。どのように役立つかということについては大きく2つの概念がみられた。一つは「聴く人」を意識した演奏を学ぶこと、そしてもう一つは地域の人々の心に自分たちが学んできた音楽を届ける、というものである。このことについて対象者は以下のように語った。

“演奏するときってやっぱり自分本位、自分本位っていうか、何だろうな。一方的に聞かせるのじゃ意味がないと思うんですよ。自己満足で終わってしまうので、先生にもよく言われることなんですけれども、「演奏家は表現者であって、確かに演奏すれば演奏家かもしれないけれど、演奏家は聴く人がいて、初めて演奏家だ」っていうことを聞いて、うわ、なるほどって。「聴く人をまず第一に考えて、自分の演奏の先に演奏を聴いてくれる人がいるっていうことを考えて演奏するのが演者だ」っていうふうに仰ったので、それを僕も今は大事にしているんで、（Fさん）”

“この、実際オータムコンサートで附属病院に行かせていただいたときに、毎年、私、3年目なんですけど、毎年聴きにきてくれるおじいさんがいて、車椅子のおじいさんなんですけど、その方がいつも演奏したら、知っている歌があれば、もう絶対歌ってくれるんです、真ん中で、いつも真ん中で歌ってくれて。でも、今年は特に演奏したときに、「川の流れるように」を最後に演奏したんですけど、そのときにそのおじいさんがすごい泣きながら歌ってくれて、もうそのときにもう私、音楽やっていて良かったなっていうのは、すごい思いました。だから、自分で満足のいく演奏、練習してきたから、この本番で発揮しようとかっていうよりは、お客さんにどれだけ自分がやってきたことを届けられるかっていう、お客さんの心をどれだけ動かせるかっていうのは、結構モットーにしているんで、すごいその地域の方とかというのは、すごい好きです。（Gさん）”

また、地域における活動を行うにあたって、コースの人数が少人数であるということによる難しさも感じているようであったが、一方で、少人数であるからこそその強みも感じているようであった。

“それこそ、少人数でできるっていうのは、少人数であればあるほどお客さんとの距離とも近いことが多いですよ。会場も小っちゃかったりするので、一緒に盛り上げる参加型のものが多かったりするので、その分、少人数でできることっていうのは、お客さんと関わる、演目中に関わるっていうことだと思っているので、質問をお客さんに投げかけたり、お客さんの間に入って行ったり、一緒にお客さんと、子供たちだったりなんですけれども、一緒に物づくりしたり、演目中に、ってこともとるのでっていうことが、大人数よりもやりやすい、その機会も多い。なので、個々と触れ合う、個々と関わる、一緒に活動するっていうことが少人数で

まることかなと、しやすいこと、少人数の強みかなと思います。(Fさん)”

“それこそ一体感じゃないけど、そういうのも生まれてきたりとか、その子ができたってなったときに、その子の、もうできたからまた次もっていうやる気とかにもつながるし、実際終わった後、反省会みたいなのをしたときも、来年もやりたいですって言っていたので、それはすごい何か良かったなって、少ない人数で良かったなと思いました。(Gさん)”

【理想とする音楽教育者としてのあり方】は、「それぞれが思う理想の音楽教育者」の概念から構成した。この概念は、本研究の対象とした地域における演奏会も含め、大学入学後の学びや経験、さらには大学入学前の学びや経験から形成されており、学生一人ひとりで理想とする音楽教育や、音楽教育者としてのあり方は異なっていた。

【地域の音楽教育を担う人材としての自覚】は、「クラシックに触れる機会、触れられる人が少ない高知県の現状」、「地域の人々に、日常生活の中で音楽に触れ、音楽を感じ取り、自分なりの楽しみ方を見出してもらうための教育・活動」、「数少ない音楽教育の拠点として、大学や学生が地域に貢献できることは多い」の3つの概念から構成された。対象者はこれまでの経験から、自分たちが学ぶクラシックや本格的な音楽に触れられる機会、そして実際に触れられる人が少ない高知県の現状を感じており、そうした現状を自分たちの演奏で少しでも改善していきたいという思いを持っていた。中でも特に、どんな音楽でも良いというよりは、クラシックをもっと身近に、もっと深く知ってほしいという語りが多く見られた。さらに、そういった現状の高知県だからこそ、高知大学や自分たち学生が貢献できることが多いとの認識を見せた。本カテゴリーにおける学生の語りを下記に一部抜粋する。

“高知だったら僕たちが先立って、先頭に立って、先駆者まではいかないですけどもチャレンジすることができると思っているんですよ。そういうのって、大学の機関とかでもそうで、神奈川だったら音大も、あっちにもこっちにも私立の音大がいっぱいあって、隣の東京には芸大もあって、音大もバラバラバラって、いっぱいあって。もう、プロ顔負けの学生たちが、もう、わんさかいるんですけど、高知県の高等教育機関で、音楽をやっているのって高知大の教育の音楽ぐらいしかなくて、あと学短の幼児の方々がちょっと音楽に触れていると思うんですけども、専門的に音楽をやっているっていったら僕らぐらいしかいないと思うんですよ。(Fさん)”

“プロの演奏会とかもいっぱい行っているんですけど、何かすごい学生ってすごい若い人たちが一生懸命音楽をやっているっていうのにすごい感動したことがあって、やっぱりそういう学生とか、若い人が一生懸命やっているっていうのが、すごいいいんじゃないかなっていうふうに思います。(Iさん)”

## 5. 考察

### 5-1. 本研究における研究課題について明らかになったこと

本研究でたてた2つの研究課題について、インタビュー調査から明らかになったことを以下にまとめる。

**研究課題①地域における芸術教育実践は、学生の「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成しているのだろうか。**

美術教育実践と音楽教育実践とではその形は少し異なっていたが、いずれの教育実践も、学生がその活動を通じて「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成していることが本研究から確認できた。

まず美術教育実践参加者は、教育学部以外、そして低学年の学生も含まれていたが、それでも彼らは、本事業における教育実践とそれ以外の経験を統合したうえで、高知県における美術・美術教育の現状について把握し、それを踏まえたうえで子供たちを含めた地域の人々に期待する美術との接し方を考察することができていた。さらに地

域活性化や地域におけるコミュニケーションの手段としての美術・デザインを意識した語りもあり、本事業のような地域における教育実践活動が、教育者ではなく一般企業への就職を検討している学生にとっても、将来、企業や自治体、組織の中で、美術・デザイン教育を担う人材として、また美術・デザインを通じて地域振興を担う人材としてのキャリア観醸成に繋がることが明らかとなった。

音楽教育実践参加者は全員が教育学部の上級生であったこともあり、こちらも高知県における音楽・音楽教育の現状を整理したうえで、音楽教育を学ぶ自分たちが地域に貢献できることを自覚し、本事業においてもその実践を試みることができていた。また彼らは、自分の学修における授業、教育実習、地域における活動等の位置づけを明確に持っており、個々人がそれぞれの活動に目的意識を持ち、取り組むことができていた。本事業のような地域における教育実践活動は、地域の音楽教育を担う人材としてのアイデンティティを育む中で、授業や教育実習とは違う視点を提供し、教育者、演奏家としての学生の能力の幅を広げることには貢献していることが明らかとなった。

### 研究課題②醸成しているとすれば、どのように醸成しているのだろうか。

本研究では、美術教育実践参加者と音楽教育実践参加者に分けて、「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成するプロセスの仮説モデル（図8、図9）を構築した。その結果、それぞれの実践で導き出される仮説モデルが異なることが明らかとなった。

美術教育実践参加者の仮説モデルの最も大きな特徴は、「美術教育」とともに「地域との連携」というキーワードが中心にあり、それら2つをやや別の経験に基づいて語る傾向があるという点にあった。これは美術教育実践に参加した学生が、もちろん全員が美術やデザインに興味を持ってはいるが、普段の活動の主体が教育実践とは限らないことが影響していると考えられ（先述の通り、美術教育実践に参加した学生4名のうち、教育学部の学生は1名で、他3名は地域協働学部所属である）、彼らの普段の学びにおいては、美術やデザインと合わせて「地域との連携」が重要なテーマとなっていることが分かる。また美術教育実践参加者にとって、美術やデザインは、それ自体を学んだり楽しむことに加え、「地域との連携」において、地域を魅せる、地域を活性化させるためのツール、もしくはコミュニケーションのための重要で有効なツールとしても位置づけられる傾向があったことも大きな特徴である。

一方、美術教育実践参加者と比較すると、音楽教育実践参加者の仮説モデルの最も大きな特徴は、「地域における活動」は「地域における教育実践」というイメージで語られる傾向があったという点である。美術教育実践参加者からよく語られた「地域との連携」というキーワードはほとんど見られず、かわりに、地域の人々に音楽を届けるというイメージが多く見られた。これは、音楽教育実践参加者5名全員が教育学部の学生であることが影響していると考えられる。また学生たちの中には、自分たちは高知県において、地域の人々にクラシックのような本格的な音楽を提供できる数少ない担い手であるという自覚があり、そうした役割意識のもとで地域における活動を行うことにやりがいを感じていることも大きな特徴であった。

## 5-2. 本研究における研究課題以外で明らかになったこと

次に、本研究における研究課題以外で明らかになったことを述べる。

### ① 地域における教育実践でのレポート課題の重要性

3で述べた通り、本研究において、音楽教育実践参加者（ファミリーコンサートの活動に参加した音楽教育、及び幼児教育専攻の学生）には、活動からの気づきをまとめ地域の芸術教育を担う人材としての内省を促すため、『「ファミリーコンサート」の一連の活動から「音楽を通じて地域に貢献する」とはどういうことだと感じましたか？また音楽を通じて地域に貢献する際に大切なことや求められる力はどんなものだと考えますか？』というレポートを課した。本研究から、このようなレポート課題は、学生の内省を促す、または深める上で大変有効であることが明らかとなった。

例えば音楽教育実践参加者のある対象者は、インタビューにおいて以下のように述べた。

“先日いただいたレポートの課題にあるように、課題というか、題にもあるように、「地域にどういうふうにご貢献するか」というテーマよりも、この運営を、とにかくどうやって回すっていうことで頭がいっぱいだったというのが、終始だったかなと思います。”

このように学生は、地域における教育実践に取り組んでいる最中は、地域の芸術教育を担う人材としての自分や、地域にどのように貢献していくか、ということよりも、目の前にある活動上の課題に着目しがちである。そこで、地域における教育実践終了後に、地域の芸術教育を担う人材としての視点や地域貢献の視点から活動内容を振り返る機会（事後指導やレポート課題）などを提供することで、彼らの内省を促し、深めることに繋がると考えられる注3)。

また、本研究でインタビュー調査はできなかったのだが、音楽教育実践には音楽教育専攻の学生だけでなく、幼児教育専攻の学生も加わっており、彼らにも同じ課題でレポート課題を提出してもらった。ここでこの幼児教育専攻学生のレポート内容を紹介しつつ、「キャリア観醸成」という観点から見た地域に根ざす芸術教育実践の意義を考察したい。

幼児教育専攻の学生にとってもこのレポートが、自分たちの教育実践を地域貢献の視点から振り返る良い機会となったことが記載内容からうかがえた。また、地域における音楽教育実践を、音楽教育専攻の学生とは違う視点から考察していることが明らかとなった。その視点とは「地域の人たちの交流の場づくり」という視点である。このことに関する幼児教育専攻学生のレポート内容を以下に一部抜粋する。

“今回のファミリーコンサートは、普段演奏会などに参加しにくい子ども達も来ることのできる演奏会、というのがコンセプトだった。そのために家族で来ている人がほとんどで、家族のお出かけの場所となったようだった。来た子供の中には、サンタクロースの帽子の髪飾りをつけてきている子どももおり、コンサートを楽しみにしていたことが分かった。(中略)それだけではなく、保護者どうし、子ども同士の交流も見られ、子育て支援の場にもなったのではないかと考えられる。”

“当初私は、幼児教育コースの学生が子どもを見ることで、保護者の方にゆっくりコンサートを楽しんでもらうことが地域貢献の一環になるのではないかと考えていた。しかし、実際にはミニコンサートを子どもと一緒に見る親御さんも多く、どちらかというと保護者と子どものコミュニケーション手段の一つとなっているようであった。”

“今回のように地域にある大学でコンサートを開催し、その大学の周辺に住んでいる地域の方にコンサートに来てもらうことで大学と地域の結びつきというの生まれると思う。”

“「音楽を通じて地域に貢献する」とは、家族や、地域の方たちが、ファミリーコンサートのような場で、音楽を聴き、ともに楽しむ時間を作ることだと考える。そこでは、保護者と子供の交流の機会も自然と生まれ、普段知らなかった子供の姿や、保護者の方の息抜きにもなると考えた。また、他の家族との交流も生まれ、子供同士の交流だけでなく、保護者の方同士の交流も生まれ、子育て支援の役割も果たせると考えた。地域の方たち同士のかかわりも生まれ、近年問題となっている、地域間での交流の希薄化の改善にもつながるのではないだろうか。”

“音楽に興味を持ってもらうことで、地域の方々が多くこのようなコンサートに参加し、その場で来てくださった方同士の交流が生まれ、地域の活性化につながると感じた。そして、音楽にあまり興味がない人にも積極的にこのようなコンサートへの参加を促すことでさらに音楽を通して地域貢献ができるように感じた。”

上記の通り、幼児教育専攻の学生は、ファミリーコンサートにおいて教育実践を行いながら、幼児・児童、そして保護者等、そこに来ていた人々の観察を行い、それらを通じて、大学が行う地域における教育実践活動が、子供同士、保護者同士、保護者と子供、大学と地域、地域間、といった様々な交流の場として機能しており、そのことが地域活性化や地域貢献に繋がるのではないかと、という新たな視点を示した。

このように、本研究から、学生は、地域に根ざす芸術教育実践を通じて、それぞれの専攻や研究内容、将来像に沿ったキャリア観を醸成していることが明らかとなった。このことから、こうした地域に根ざす芸術教育実践は、芸術教育を専攻する学生以外にとってもキャリア観の醸成に良い影響を与えようと考えられる。そして、今以上に異なる分野の教員や学生、機関が連携して芸術教育実践を行うことで、より多様な視点から教育プログラムを設計することができ、広い範囲の地域の人々に芸術を届けることができる可能性を秘めていると考えられるだろう。

## ② 学生が共通して感じていた教育実践上の課題

本研究では、美術教育実践と音楽教育実践という2つの実践を取り上げたが、いずれの教育実践においても対象者が共通して語った教育実践上の課題があった。それは、こうした地域における教育実践を行う際に、子供たちの創造性や自由度、楽しんでもらうことを尊重しつつ、当日の教育目標を達成することの難しさ、という課題である。この課題は、美術教育実践参加者においては「教育実践における自身の課題の深まり」、音楽教育実践参加者においては「ファミリーコンサートでは、楽しんでもらうことと音楽教育との葛藤を経験」という概念に含まれる。教育学部の学生は、教育実習であれば、教育上のねらいの達成や子供たちの成長を第一目標とするが、教育実習以外の教育実践では、教育実習よりも子供たちを楽しんでもらいたいという気持ちがあり、それが葛藤に繋がるようであった。また教育学部以外の学生も同じことを感じており、美術やデザインの楽しさを感じてもらいつつ、主旨に沿って子供たちに活動してもらおうことの難しさを感じているようだった。このように、学年や専攻、活動内容などに関わらず、地域における教育実践において学生が共通して難しいと感じる教育実践上の課題があきらかとなった。

## 6. まとめ

本研究では、高知大学 令和元年度「学長裁量経費」に採択された「地域に根ざす芸術拠点づくり—附属機関との横断的研究体制の構築（代表者：野角 孝一）」の一環で実施した芸術教育実践を事例に、附属機関と連携した地域に根ざす芸術教育実践は、その活動に参加する学生たちの、①「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成しているのか、そして醸成しているとしたら、②どのように醸成しているのか、という2点を明らかにすることを目的とした。

上記課題を明らかにするために、美術教育実践に参加した学生4名、音楽教育実践に参加した学生5名に対して半構造化インタビュー調査を実施し、M-GTAの手法を用いて分析を行った。その結果、附属機関と連携した地域に根ざす芸術教育実践は、その学生が目指す職業に関わらず「地域の芸術教育を担う人材としてのキャリア観」を醸成していること、しかしその醸成プロセスは美術教育実践と音楽教育実践とで異なっていること、レポート課題は学生の内省を促す上で大変有効であること、地域における教育実践において学生が共通して抱える課題があること、の4点が明らかとなった。本研究で明らかになったことは、地域における教育実践を通じて学生のキャリア観を醸成していく上で大変重要な視点であると考えられる。

一方で、今回は幼児教育専攻の学生へのインタビュー調査を実施することができなかった。幼児教育専攻の学生のレポート内容と音楽教育専攻の学生のレポート内容は、同じ活動を対象に同じテーマで記載してもらったにもかかわらずその内容が大きく異なっていた。このことから幼児教育専攻の学生に対してもインタビュー調査を行うことで、異なる観点から本研究課題について考察、もしくはどの専攻の学生にも共通する事柄の抽出をより多くできた可能性がある。こうした対象事例の蓄積については今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究は、高知大学 令和元年度「学長裁量経費」からの助成を受けました。助成に感謝するとともに、本研究に協力して下さった関係者の皆様、そしてインタビュー調査に協力して下さった学生の方々にもお礼申し上げます。

## 注釈

注1) 文部科学省「大学の機能別文化の進捗状況」によれば、国立大学運営費交付金の「3つの重点支援枠組み」は①地域のニーズに応える人材育成・研究を推進、②分野ごとの優れた教育研究拠点やネットワークの形成を推進、③世界トップ大学と伍して卓越した教育研究を推進、となっており、どの枠組みにするかは各大学が選択できる仕組みである。①を選んだ大学は55、②は15、③が16となっている。

注2) 高知大学のウェブサイトによると、高知大学中期計画【40】は「毎年度、附属学校園を活用した研究計画を策定し、附属学校園と学部の教員による協働型授業などを実施するとともに、学校現場で指導経験のある学部教員の割合を30%とすることにより、学部教員の実践的指導力の強化に繋げる。また、附属学校園での教育実習と実地授業の振り返りによる「教材開発演習」を組み合わせることにより、学生に質の高い実践的学習の場を提供し、学校現場における実践的課題解決に資する能力を身に付けさせる。」となっている。

注3) 実際に本研究においても、インタビュー終了後のノンオフィシャルな会話の中で、何名かの対象者から、「レポートを書いた時に初めて、この演奏会が地域貢献に繋がるんだと改めて認識しました」というようなコメントや、「インタビューで質問されて改めて考えました」といったコメントがあった。

## 引用・参考文献

- 1) 野角孝一, 吉岡一洋, 矢田崇洋, 森下英恵, 岡谷里香, 青木佐樹, 鎌倉正子, 中山美香, 玉瀬友美 (2020) 絵具遊び活動: アート週間活動報告, 高知大学学校教育研究, 2, 85-92.
- 2) 吉岡一洋, 土井原崇浩, 野角孝一, 中村るい, 柴英里, 利岡加奈子 (2017) 病院空間における美術の役割: 高知大学医学部附属病院における美術の活用と作品鑑賞の教育効果の検証, 高知大学教育実践研究, 31, 1-7.
- 3) 西條剛央, 沖尚彦, 金堂聖子, 上原美穂, 天江健史, 佐野和弘, 大野慎悟, 奥田祐介, 野田麻衣子 (2014) MBAでステップアップに成功したMBAホルダーは、MBA課程でどのような経験をし、それをどのように役立てているか?: SCQRMによる視点提示型研究, 早稲田国際経営研究, 45, 149-167.
- 4) 西條剛央 (2007) SCQRM(スクラム)ベーシック編: ライブ講義・質的研究とは何か, 新曜社.
- 5) 西條剛央 (2008) SCQRM(スクラム)アドバンス編: ライブ講義・質的研究とは何か, 新曜社.
- 6) 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践: 質的研究への誘い, 弘文堂.
- 7) 宮原浩二郎・藤阪新吾 (2012) 社会美学への招待: 感性による社会探求, ミネルヴァ書房.

令和2年(2020)10月14日受理

令和2年(2020)12月31日発行